Journal of Tama Clinical Psychology
No. 8 2014 p.1-11

研究論文

育った家族との関係からみた若年層シングルマザー

池田　茜（福）中心会　相模原南児童ホーム　**石井雄吉**　明星大学人文学部

キーワード：シングルマザー，家族

抄録

若年層シングルマザーの子育てにおいては，子どもの発達に家庭の不安定さから生じる負の影響が指摘されている。そこで，シングルマザーの自己概念・家族概念をとおして，シングルマザーを生む要因，および，その子育て支援について検討した。自己・家族概念の測定には，自己版・家族版 Twenty Statements Test(以下 ,TST) を，また，家族間の心理的距離の測定には，家族関係単純図式投影法 (以下 , 家族図式法) を用いた。

自己版 TST の結果 , 子どもの内容が多い者は肯定的自己群に属し , 自分についての内容が多い者は否定群に属した。家族版 TST の結果 , 自己版 TST において自己肯定であった者は家族イメージも肯定的であり , 否定的であった者は家族イメージも否定的であった。つまり，子育ても含めたシングルマザーとしての自己を肯定的に認識するのか否定的に認識するのかは，自身の家族イメージと密接に関連していると考えられた。

また , 家族図式法によるシングルマザーが抱く家族間の心理的距離は，夫婦間の結びつきが弱く , 母子間が密着しており，また，現実に比して理想を高く持ち過ぎてしまう傾向がみられることから，生育環境も早期離婚の一因となっていることが窺えた。

Ⅰ　問題

1．母子世帯の増加と若年化

近年，子どもをもつ夫婦の離婚は離婚全体に占める割合が高くなっている（松井・清坂，2004）。そして，離婚後子どもは妻に引き取られる場合が多く，母子世帯（シングルマザー）数は増加をたどっている（松井・清坂 ,2004; 福田 ,2011）。その結果，子どもの 17 人に 1 人は母子家庭で育っており，母子家庭は珍しいことではなくなってきた（福田，2011）。また，シングルマザーになった理由は ,1983 年で死別 36.1%，生別 63.9% であったが，2006 年で死別 9.7%，生別 89.6% と生別離婚の割合が高くなってきている（福田 ,2011）。さらに，2011 年になると生別離婚は 92.5％と全体の 9 割を越えている(厚生労働省雇用均等･児童家庭局，2012)。そして，生別離婚に至った理由としては，暴力･中毒･ギャンブル・人生のパートナーとしてみきりをつけたなどがあげられている（福田 ,2011）。

また，2006 年度の調査報告によると生別離婚によるシングルマザーの平均年齢は 33.3 歳であったが（厚生労働省雇用均等・児童家庭局，2007），2011 年には 32.3 歳となり , シングルマザーにいたる年齢の平均は 1.0 歳低下し若年化している（厚生労働省雇用均等・児童家庭局 ,2012）。

20 歳未満から 29 歳までに絞ってみると，2006 年は 20 歳未満が 0.8 %，20 代が 28.6 であったのが（厚生労働省雇用均等・児童家庭局 ,2007），2011 年には同 1.7％，同 32.1％と全体のおよそ 3 分の 1 が 20 歳未満から 20 代にシングルマザーになっている（厚生労働省雇用均

等・児童家庭局 ,2012)。

そして，シングルマザーになった時の子どもの年齢は 0 ～ 2 歳が 35.1％と最も多く，3 ～ 5 歳までの小学校入学前の子どもの 20.9％と合わせると，小学校入学前に母子家庭になった子どもの数は，過半数を超えるている（厚生労働省雇用均等・児童家庭局，2007;2012)。

2．シングルマザーの心理的問題

シングルマザーは様々な点において大きなプレッシャーを抱えストレスも高まっている（松井・清坂 ,2004)。母子家庭の若い母親は育児と仕事の両方を支えており，普通家庭以上に生活や子育てに困難が多いと考えられる。特に小学校入学前までの子どもを持つ母子世帯における就業状況は半数以上がパート・アルバイト等であり，正規の職員である割合は，末子の年齢が低くなるにつれて減少する傾向がみられる（厚生労働省雇用均等・児童家庭局 ,2012)。そして，2010 年の一年間における平均年間収入状況は正規社員などを含めても 181 万円である（厚生労働省雇用均等・児童家庭局 ,2012)。このような貧困問題は，シングルマザーの特徴としてあげられる（福田 ,2011)。20 歳未満から 20 代のシングルマザーの就業状況は，年代，学歴などから他の年代より正社員になりにくいため，さらに厳しい経済状況であると考えられる。

また，子どもを一人で育てなければならない不安，母親が父親役と二役演じなければならないなどといった子育ての悩みも抱えている（松井・清坂 ,2004)。子育て期のソーシャルサポートに関する研究によると，母親の子育てへのサポートは夫からの情緒的なサポートが重要であることが明らかであり（福田 ,2011)，その支えのないシングルマザーにはさらなるストレスが存在することが窺える。さらに，一人親家庭の子ども達は両親揃った家庭で育つ子ども達より心の問題が生じやすいこと（松井・清坂 ,2004）も母親にとってのストレス要因であろう。

シングルマザーにとっての相談相手は親族が最も多い(厚生労働省雇用均等･児童家庭局 ,2012)。しかも，血縁からのサポートは母親の育児ストレスを低減させていく効果があることが指摘されている（福田 ,2011)。また，シングルマザー本人の親からは，実家の提供，金銭的援助，保育や家事の援助，食事，子どもの衣服や玩具など多彩な援助がなされている（福田 ,2011)。実家の提供には，生活費に困窮したための一時的な避難，子どもとの暮らしに自信がなく精神的に頼るという場合が含まれる（福田 ,2011)。

しかし，このように生活面でも育児面でも重要なサポート役である頼れる親族がいないシングルマザーが存在する（福田 ,2011)。既述のように，若年層のシングルマザーがこのようなサポートを受けられない立場にあったとしたら，経済的にも，心の健康的にもさらに大きな問題が生じると考えられる。

シングルマザーは子どものために犠牲になることが当然であると考え，一人の人間として自分自身の生き方を探求することの否定に繋がる可能性があり，シングルマザーであることが自己否定感を導くことになりやすい（小林 ,2011)。

4．シングルマザーの家族イメージ

30 代～ 40 代の生別離婚率が 90％であるのに比べ，若年層の生別離婚率は 98％であり，死別以外の原因があって夫婦関係を解消した夫婦は多い（厚生労働省雇用均等・児童家庭局 ,2012)。この若年での離婚の背景には，シングルマザーのもつ家族イメージの問題があるかもしれない。しかし，シングルマザーの問題について，よい家族イメージがない母子家庭の現状・貧困問題などの研究はなされているが，シングルマザー自身の自己イメージと家族イメージとの関係，その実の親や家族との関係といった観点から検討した研究はほとんどみられない。そこで，シングルマザーの

問題について，そのような家族や親との関連という観点からアプローチすることも彼女らの理解や支援に寄与するであろう。

Ⅱ　目的

若年で結婚し，早期に離婚に至りシングルマザーとなった者について，自己イメージ，家族イメージ，および，シングルマザーが現実に育った家族関係と理想の家族関係との関連（家族機能・心理的距離）という観点から検討を加えた。

Ⅲ　方法

1．対象者

父親のいない児童（満 20 歳未満の子どもであって，未婚のもの）を養育しており，死別を除く未婚，離婚のシングルマザーで，縁故法により抽出された 29 人を対象とした。この対象者に郵送にて調査票などを配付し，20 人から回答があった。回答者の平均年齢は 23.9 歳(SD=2.73：21 歳～ 29 歳）であった。

2．施行した検査と手続き

1）自己イメージと家族イメージとの測定

既述のように，シングルマザーは自己否定的であると考えられることから，自己イメージを測定するために Twenty Statements Test（以下 ,TST）（Kuhn & McPartland,1954）の和訳版である 20 答法（星野 ,2000）を自己版 TST として使用した。

また，シングルマザーのもつ家族イメージについては家族版 TST を用いて評定した。家族版 TST とは，TST を応用したものであり「家族は」という刺激語から始まる文章を作成し，そこから家族イメージが肯定的なのか否定的なのかを調査するものである。回答の方法と評定とは TST と同様である。TST の評定にあたっては，赤崎ら（2013）によると主観的反応に個人の自己概念が表現されやすいことから，本研究では主観反応のみを対象にした。

2）家族機能の測定

シングルマザーと家族との関係を家族機能という観点からも調査するために，日本語版 FACES Ⅲ（以下 ,FACES Ⅲ）（草田 ,1995）を使用した。FACES Ⅲとは，家族関係を測定するツールとして Olson et al によって提唱された円環モデルに基づき（立山 ,2005; 溝上 ,2010），家族機能を「凝集性（家族成員間の情緒的絆）」「適応性（状況的・発達的ストレスに応じて勢力構造や役割を変化させる夫婦・家族システムの能力）」「コミュニケーション（凝集性と適応性の両次元を促進させる働き）」の三次元でとらえるものである（立山 ,2005）。

ただし，FACES Ⅲは質問文の意味のわかりにくさによって概念的妥当性がぼやける可能性を指摘されていた（立山 ,2005）。そこで，今回は立山（2005）が大学生を対象に，翻訳のわかりにくさを調査し問題点を改善し翻訳し直したものを使用した。

3）家族間の心理的距離の測定

シングルマザーのもつ家族の心理的距離を測定するために，家族関係単純図式投影法（以下，家族図式法）（水島 ,1978）を使用した。家族図式法は図式投影法の一種であり，家族成員を表す一円玉大の円形コマを用い，家族枠を表す直径 12 センチの円が書いてあるＢ５版の台紙に現実，理想の家族関係を表現するイメージ的投影法である（草田 ,2002）。

家族図式法は家族の心理的構造や，家族の満足度，心理的距離に対する家族成員間の認知のズレ，現実と理想の家族関係に対する認知を視覚的に評価でき，健康な家族とそうでない家族をスクリーニングできる（小島 ,2011）。言語では表現しにくい家族に対するイメージや感情などを直接表現でき，専門家と家族の双方から家族関係を視覚的に把握できるという利点をもつ（小島 ,2011; 茂木 2003）。

本研究では父，母，自分の 3 者のみを対象とするため，円形のコマを現実用と理想用との 6 枚配布し，それぞれに「自分」,「父」,「母」の記入を求めた。そして「そのコマを家族と見立ててあなたの気持ちに合うように動かしてみてください。」と使い方を説明した。

現実の家族については,「台紙上の円を家族として，家族の関係が気持ちの上で実際にどうなっているか，コマを使って表してください。」と教示した。理想の家族については,「こうであったらいいなという理想の家族関係を表してください。」と教示した。

4）分析方法

① TST について

自己・家族版 TST ともに 主観反応の内容を肯定的か否定的かに判別し，そのどちらの出現率（肯定内容数 or 否定内容数 / 主観反応数）が多いかによって対象者を肯定優位群（以下 , 肯定群）と否定優位群（以下 , 否定群）とに分類した。

② FACES Ⅲについて

現実用と理想用とで質問用紙を 2 枚用意しそれぞれの凝集性･適応性の平均点を算出した。その後，草田（1995）の集計方法をもとにどのタイプに位置するかを調査した。さらに , 自己 TST および家族版 TST において否定群であった対象者のデータのみでの集計も行った。

③家族図式法について

「自分」「父」「母」の心理的距離については，（1）父子間距離，（2）母子間距離，（3）父母間距離，（4）理想と現実の距離（以下 , 現実理想間距離）をそれぞれコマの中心間で測定した。（4）については（1）（2）（3）それぞれの現実距離から理想距離を引いた値（絶対値）とした。現実における各 2 者間の距離差 , 理想における各 2 者間の距離差，そして，各 2 者間の現実理想間距離の差については，ウィルコクソンの符号付順位和検定により比較した。さらに，TST における否定群だけを対象として，各 2 者間の比較も行った。

Ⅳ　結果

1． 対象者 20 名は，主婦が 5 名 , 水商売が 9 名 , 介護職が 2 人名，事務が 1 名，飲食が 2 名（内 1 名兼職）, 内職が 1 名 , 看護系が 1 名であり，主婦を除く 15 名の内，昼間勤務（およそ 9：00 ～ 17：00）が 6 名，夜間勤務（およそ 18：00 ～ 05:00）が 10 名，不定期が 1 名であった（兼職 1 名）。

結婚歴については 18 名が有りで，2 名がなしであった。この 18 名が結婚した年齢の平均は 19.9 歳であり，最低年齢が 17 歳（1 名）で最高年齢が 22 歳（3 名）であった。また，彼女らの離婚した平均年齢は 22.7 歳であり，最低年齢が 18 歳（2 名）で最高年齢が 24 歳（2 名）であった。結婚期間は平均 2.6 年で一番短くて半年未満（4 名）, 一番長くて 6 年（1 名）であった。

妊娠した平均年齢は 18.5 歳で，最低年齢が 15 歳（1 名）, 最高年齢が 22 歳（1 名）であった。結婚した時の状況から未婚を除く 18 組全てが結婚より妊娠が先であった。

離婚した理由として一番多かったものは性格の不一致（9 名）であり，次に多かったのは夫の無職を含む金銭問題（7 名），浮気問題（6 名），子育て方針の不一致（4 名）, 夫のギャンブル（3 名），その他（2 名）が挙げられた（複数回答）。

子どもの年齢については，第 1 子の平均が 4.4 歳，第 2 子の平均が 3.2 歳であった。なお，第 2 子までいた家庭は 7 組あり，第 3 子までいた家庭が 1 組あった。

2．TST の結果

自己版 TST で肯定群に分類された者は 13 人，否定群に分類された者は 7 人であった（表 1）。家族版 TST の結果は，自己版 TST で肯定群であった者は肯定群に属し，否定群であった者は否

定群に属していた（表 1）。

記述内容の特徴として，肯定群の自己版 TST には「私は子どもの為に頑張れる」「子どもが生き甲斐です」といった子どものこと，自分の母親としての内容が多くみられたのに対し，否定群での子どもの内容は極僅かであり，自分自身に対する内容が多くみられた。

肯定群の家族版 TST の内容は「家族はいいもの」「家族は必要なもの」といったポジティブなものであったことに対し，否定群は「家族はよくわからないもの」「家族はなくてもいいもの」とった家族に対するネガティブなものであった。

また，職業状況と照らし合わせると，否定群 7 人はすべて水商売であり，勤務時間も夜勤が多かった。逆に，主婦やパートタイムに働いている母親は肯定群に属している者がほとんどであった。

表 1　自己版 TST および家族版 TST の平均

		年齢	自己優位比率	家族版優位比率
否定群（N=7）	平均	23.4	0.67	0.82
	SD	2.2	0.12	0.13
肯定群（N=13）	平均	24.2	0.90	1.00
	SD	2.9	0.11	0.93

3．FACES Ⅲの結果

FACES Ⅲの凝集性尺度・適応性尺度の平均点を現実と理想それぞれ算出し，4 段階のレベルに分類した（表 2）。

表 2　FACES Ⅲの平均値（全体）

現実の家族	平均	SD
適応性	26.7（構造化）	11.0
凝集性	24.9（遊離）	8.6
理想の家族	平均	SD
適応性	41.65（無秩序）	5.3
凝集性	38.8（結合）	4.6

現実の家族の結果をみると，適応性は構造化，また凝集性は遊離であり，中間群に位置した。また，理想の家族において，適応性は無秩序，凝集性は結合と，現実とは真逆の結果になった。こちらも中間群に位置した。また，否定群のみの結果をまとめたものを表 3 に示した。

表 3　否定群の FACES Ⅲ

現実の家族	平　均	SD
適応性	18.9（硬直）	4.9
凝集性	18.1（遊離）	3.2
理想の家族	平　均	SD
適応性	39.1（無秩序）	5.6
凝集性	37.4（結合）	4.8

否定群の結果（表 3）をみると，現実の家族における適応性は硬直，凝集性は遊離であり，極端群に位置した。現実の家族の結果は，否定群のみの場合，極端群に位置し，シングルマザー全体に比して家族機能に問題をより呈しやすいことが示された。

4．家族図式法の結果

①心理的家族間距離の平均

家族図式法で得られた全体の結果を表 4 に示した。

表４　家族図式法の中央値・平均値・標準偏差値（全体）

		現実			理想			理想現実		
	年齢	父 - 母	母 - 子	父 - 子	父 - 母	母 - 子	父 - 子	父 - 母	母 - 子	父 - 子
Me		9.65	2.35	9.55	2.90	2.05	2.30	6.45	1.20	6.80
M	22.85	8.80	3.97	9.35	2.87	3.10	2.81	6.76	2.90	7.07
SD	5.75	5.25	2.58	4.31	1.48	2.48	1.95	4.78	2.65	4.33

20 組中９組はコマが円の枠をまたいだり，枠外へ飛び出したりしていた。

②現実における２者間距離の比較

全体の現実における２者間距離を Wilcoxon の順位和検定により比較した（表５）。20 名中２名が母子家庭で育ち，家族が母と自分とだけの図式であったため，その２つデータを抜いた 18 人分のデータで検討した。その結果 , 母子間（M=3.97），父母間（M=8.80 ）において，父母間の方が母子間に比して有意に離れていることが示された（p<.01）。また，母子間（M=3.97）と父子間（M=9.35）との比較では，父子間の方が母子間に比して有意に離れており（p<.01），母子間は接近しているが，父子間は離れている母子密着型が多かった。

表５　現実における２者間の比較（N ＝ 18）

	M	SD	Me	T
父子	9.35	4.31	9.55	76.6（n.s.）
父母	8.80	5.25	9.65	
母子	3.97	2.58	2.35	24.0*
父母	8.80	5.25	9.65	
母子	3.97	2.58	2.35	22.0*
父子	9.35	4.31	9.55	

＊　P<.01

③理想における２者間距離の比較

全体の理想における２者間距離を Wilcoxon の順位和検定により比較した（表 6）。母子家庭で育ったその２つデータを抜き，18 人分のデータで検討した。その結果，すべての距離間に有意差はみられなかった。

表６　理想における２者間の比較（N ＝ 18）

	M	SD	Me	T
父子	2.81	1.95	2.30	43.0（n.s.）
父母	2.87	1.48	2.90	
母子	3.10	2.48	2.05	43.0（n.s.）
父母	2.87	1.48	2.90	
母子	3.10	2.48	2.05	33.0（n.s.）
父子	2.81	1.95	2.30	

④理想と現実との比較

全体の現実と理想とにおける２者間距離を Wilcoxon の順位和検定によりそれぞれを比較した（表 7）。父母間と母子間については前項の検定に合わせるために，やはり 18 人のデータで検討した。その結果，父母間（M=8.80, 2.87），父子間（M=9.35,2.81）において，現実の家族間距離は理想の家族間距離と比べ有意に離れていた（p<.01）。また，母子間については，理想と現実とで差がなかった。

表７　現実と理想とにおける２者間の比較（全体）

	M	SD	Me	T
父母（N ＝ 18）	8.80	5.25	9.65	5.0*
	2.87	1.48	2.90	
母子（N ＝ 18）	3.97	2.58	2.35	69.0（n.s.）
	3.10	2.48	2.05	
父子（N=20）	9.35	4.31	9.55	18.0*
	2.81	1.95	2.30	

※上段が現実距離，下段が理想距離　　*　P<.01

TST で分類された肯定群・否定群別に現実と理想との関係を表８に示した。現実距離では，否定群の方が肯定群よりもどの２者間でも距離が大きかった。理想距離では，どの２者間でも 1.5cm 以内の差であり，理想・現実間差でも 1.5cm 以内であった。

表８　家族図式法の平均及び中央値（群別）

否定群（N ＝ 7）	年齢	否定率	現実			理想			理想現実差		
			父 - 母	母 - 子	父 - 子	父 - 母	母 - 子	父 - 子	父 - 母	母 - 子	父 - 子
Me			11.80	5.30	9.70	3.40	2.10	2.10	6.40	2.30	6.20
M	23.4	0.7	12.58	5.77	11.42	3.81	2.31	2.30	7.54	3.63	7.51
S D	2.23	0.12	3.16	5.22	4.12	1.63	0.90	0.83	4.40	5.02	4.74
肯定群（N ＝ 13）	年齢	肯定率	父 - 母	母 - 子	父 - 子	父 - 母	母 - 子	父 - 子	父 - 母	母 -子	父 - 子
Me			8.60	2.30	7.70	2.20	2.00	2.30	6.50	1.20	7.40
M	24.0	0.9	8.37	3.40	8.77	2.61	2.97	3.16	6.07	2.46	6.92
S D	24.2	0.10	5.01	2.58	4.30	1.25	2.32	2.24	4.91	2.97	4.03

Ⅴ　考察

１．TST の結果より

自己版 TST で肯定群に分類された者は，家族版 TST でも肯定群に属し，同様に否定群であった者は，家族版 TST でも否定群に属していたことである（表 1）。肯定群における自己版 TST の回答には，「私は大切な子どもがいる」「私は子どもが大好きだ」などの子どもに関する肯定的な記述が多く認められた。家族版 TST の回答にも，「家族は仲が良いのがいい」「家族は幸せなものである」などの肯定的なものが多くみられた。

逆に，否定群における自己版 TST の回答には子どもに関する記述がほとんどなかった。家族版 TST に関しても「家族はよくわからないもの」「家族はなくてもいいもの」などの否定的な内容が多く認められた。また，否定群では，子どもと一緒に暮らせていない対象者が２人，仕事などでほぼ実家に預けっ放しで一緒に暮らせていない対象者が１人おり，さらに，仕事も水商売や夜勤務の者も多いことから，子どもと過ごすせる時間があ

まりなく，子どもとのコミュニケーションをとる機会が少なく，関係も希薄であることが示唆された。

一方，子どもに関する肯定的な内容が多くを占めていた肯定群は，主婦や昼勤務者が多いことから，子どもとのコミュニケーションや一緒に過ごす時間が充分に取れていて，普段から子どものことを考える機会が多いのではないかと考えられた。

シングルマザーであることは自己否定感を導くが（小林 ,2011），肯定群の自己版 TST に「私は子どものために頑張れる」,「子どもが生き甲斐です」といった回答がみられることから，彼女らの自己肯定感は，子どものために自分がすることを犠牲と考えずに , 子育てに対し喜びを感じ，ポジティブな考えをしていることによると考えられる。家族版 TST の回答が肯定的であるのも，今の子どもとの生活によい感情があるからではないかと考えられる。

逆に，否定群の自己版 TST に自己否定の内容が多く，子どもの内容が少なかったことから , 否定群の場合，優先順位はまだ自分が先であり，子どものためにすることを自己犠牲と考えているのではないかと思われる。それが小林（2011）の言う自己否定感につながるのではないであろうか。

また，否定群の 7 人中 5 人は自分も母子・父子家庭であった。家族版 TST の回答が否定的であったことには，片親家庭という生育環境も一因となっている可能性が窺われた。

2．FACES Ⅲの結果より

シングルマザー全体でみると，現実の家族を対象にした FACES Ⅲの結果は構造化 - 遊離であった（表 2）。これを円環モデルでみると，適応性は中間レベルより低く，凝集性は非常に低いレベルにある中間群に位置することになる。したがって，状況的危機や発達的危機に対して，家族システムの勢力構造や役割関係などを変化させる能力は普通より少し低い程度のレベルであるが，家族成員が互いにもつ情緒的な繋がりは最も低いレベルと言うことができる。これは育ってきた家族関係の希薄さによるものであり，現実の家族関係には何かしら問題のあることが示唆している。

また，理想の家族を対象にした FACES Ⅲの結果は無秩序 - 結合であった（表 2）。理想の家族では適応性が非常に高く，凝集性は中間より高いレベルにあり，家族システムの勢力構造や役割関係などを変化させる能力が非常に高いレベルであった（表 2）。しかし，機能度が極端に働き過ぎると，結果として家族に問題を呈しやすくなる（立山 ,2005）。このことから，同群の抱く理想の家族イメージは機能度が極端に働き過ぎであり，健康的な機能を果たさないと考えられる。

現実の家族と理想の家族との差が大きくみられたのも特徴的であった。適応性では約 15 点の差があり，凝集性では約 14 点の差がみられた。また，どちらも理想の点数方が高いことから，現実では家族関係が希薄で適応性も低い方であるのに対し，理想では家族が密着ぎみで，適応性に関しては規則や規律などがなく、家族での決まりことやルールなさ過ぎるような関係であることが明らかになった。つまり，シングルマザーの抱く家族イメージには，現実と理想との家族機能に大きなギャップが存在し , それはどちらも機能的に働く家族関係ではないことが窺われた。

否定群だけの結果をみると，現実では硬直 - 遊離と極端群に位置した（表 3）。適応性も凝集性も点数が非常に低く，家族成員間の絆や関係性が希薄であること，ルールや規則が多過ぎるため，家族機能が硬直状態であることが示された（表 3）。

理想では無秩序 - 結合となり点数もあまり変らなかった（表 3）。しかし，現実と理想との差は , 適応性で 20.2 点の差があり , 凝集性でも 19.3 点の差がみられ，シングルマザー全体に比して現

実と理想とに大きな差が認められた。つまり，自己・家族イメージが否定的な群では，家族機能において，現実と理想とにより大きなギャップがあると言える。

3．家族図式法の結果より

1）現実の家族関係について

シングルマザー全体でみると，父母間・父子間距離の中央値は約 10cm であり，母子間の約 2cm に比して 5 倍近くあり，母子に比べ父子と父母が遠く離れている母子密着型が多くみられた（表 4）。また，父母間とほぼ同程度に，父子間の距離が遠く，父親との関係性の悪さが窺えた（表 4）。

家族の健康度を測るうえで父母間，父子間の心理的距離が特に重要な指標（茂木 ,1966）と言われている。また，夫婦間の結びつきが弱く，父親が孤立し母子間が密着していると家族の健康度は低いことが示唆されている（小島 ,2011）。このように家族関係が固定されていると，母親が中心になり過ぎて問題解決がうまくいかないことが考えられる（茂木 ,1997）。つまり，この父母間・父子間の距離が大きいことは，家族の健康度における何かしらの問題を示唆していると言える。

肯定群・否定群を比較した結果（表 8），すべての家族成員間の距離は否定群の方が大きかったことから，自己や家族に否定的なイメージがあると，家族関係にも距離をより感じやすいのではないかと考えられる。

2）理想の家族関係について

シングルマザー全体でみると，どの家族成員間にも有意な差が認められなかったことから，彼女らにとっては，父母間，父子間，母子間でバランスのとれた関係が理想であることを示している（表 6）。小島（2011）は理想の家族関係について「どのような現実の家族関係を認知したとしても，理想の関係では各成員間が近い関係を望むことが示されている」と指摘している。

また，肯定群･否定群を比較した結果（表 8），母子間と父子間とでは 0.5cm 未満の差 , 父母間は 1.2cm しか差がなかったことからも，理想の家族関係はどのような自己イメージをもっているかに関係なく同じような心理的距離になると考えられる。

3）現実と理想との差について

父母 , 父子間で現実と理想とに有意な差が示された（表 7）。既述のように , 家族の健康度を測る上で父母 , 父子の心理的距離が特に重要な指標であるのにも関わらず理想と現実とで大きなギャップがあるということは何かしらの問題を呈しやすいと考えられる。特に，夫婦間での理想と現実のギャップが大きいことは，シングルマザーになる原因の一つでもある夫婦間の問題に影響を与えているのではないかと考えられる（表 7）。

既述の離婚理由では，性格の不一致が一番多かったが，これは相手への期待と現実との不一致とも読み取れるので，彼女らの早期離婚の背景には，家族間の心理的距離の理想と現実とに大きなギャップがあったことも一因となっていたかもしれない。

4．まとめ

シングルマザーの自己・家族イメージが肯定的なのか否定的なのかは，子どもとの関係性が大きな要因となっていた。また , 理想と現実とのギャップが大きく，しかも，その理想している家族関係は過度に理想的であり，決して健康的なものであるとは言えなかった。さらに , 理想の家族関係は，自分の育った家族関係と真反対の関係がイメージされやすいことから，育った環境も早期離婚の一因であることも窺えた。

文献

赤崎和也・滝沢毅也・石井雄吉（2013）. Twenty Statements Test（TST）からみた抑うつと認知的歪みとの関連 . 神奈川県精神医学会誌 , 62, 3-8.

福田真奈（2011）. 親と断絶したシングルマザーの現状と課題～必要なソーシャルサポートと子どもへの影響～ . 白鷗大学教育学部論集 , 5, 395-412.

星野　命（2000）. 二０答法 . 詫摩武俊他編 , シリーズ･人間と性格 第６巻 , 性格の測定と評価 , プレーン出版 , pp137-155.

小林恵一（2011）. 母子生活保護世帯に見る母子家庭の状態像についての一考察～生活保護母子世帯の母親との面談結果の検討を通じて～ . 江戸川学園人間科学研究所紀要 , 27, 146-165.

小島弓枝（2011）. 青年期における家族関係の認知と抑うつ感の関連～家族関係単純図式投影法を用いた研究～ . 北西学園大学大学院論集 , 2, 95-105.

厚生労働省雇用均等・児童家庭局（2007）. 平成 18 年度全国母子世帯等調査結果報告 .

厚生労働省雇用均等・児童家庭局（2012）. 平成 23 年度全国母子世帯等調査結果報告 .

Kuhn,M.H. & McPartland,T,S.（1954）.An empirical investigation of self attitudes. American Sociological Review, 19:68-76.

草田寿子（1995）. 日本語版 FACES Ⅲの信頼性と妥当性の検討 . カウンセリング研究 , 28, 154-162.

草田寿子（2002）. 家族関係単純図式投影法～家族アセスメントの視点から～ . 人間科学研究 , 文教大学人文学部 , 24, 5-10.

松井 礼・清坂芳子（2004）. 母子家庭の児童による母親の養育態度の認知と自己開示との関連～両親家庭との比較を通しての検討～ . 児童臨床研究所年報 , 17, 64-75.

水島恵一（1978）. 実証的かつ実感的な体験研究の方法とテーマ . 文教大学紀要 , 12, 1-11.

溝上菜摘(2010). 児童期の家族関係と両親イメージが現在の自尊感情に与える影響 . 佛教大学院紀要 , 教育学研究科篇 , 38, 91-106

茂木千明（1996）. 家族の健康性に関する一研究～大学生の子供の観点から～ . 家族心理学研究 , 10, 47-62.

茂木千明（1997）. 家族関係単純図式投影法による健康的な家族関係：予備的研究 . 仙台白百合女子大学紀要 . 創刊号 , 135-143.

茂木千明（2003）. 家族図式による現実と理想の家族関係の比較：家族関係単純図式投影法を用いた体験学習から . 仙台白百合女子大学紀要 , 7, 29-43.

立山慶一（2005）. 家族機能尺度（FACES Ⅲ）邦訳版の信頼性・妥当性に関する一研究 , <http://daigakuin.soka.ac.jp/assets/files/pdf/major/kiyou/18_kyoiku3.pdf>（2013 年 9 月）.

Young single mothers from the standpoint of the relations with her family in who grew up.

IKEDA, Akane
Sagamihara Minami Jidou Home
ISHII, Takayoshi
Department of Psychology, School of Humanities, Meisei University

Key Words : single mother, family, psychological distance